

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)

教会カンタータ第 79 番「主なる神は日なり、盾なり」 BWV.79

「贖宥状」は別名「免罪符」とも呼ばれているが、この訳は正しくない。罪が免ぜられるのではなく、「罪の宥（ゆる）しを贖（あがな）う」ためのものである。十字軍の頃から教会による安易な集金手段として発行されるようになり、1504 年には売り上げの 3 分の 1 が教皇のものとしてされた。宗教改革の引き金となった、教皇レオ 10 世がサン・ピエトロ大聖堂修築資金を得るため 1514 年に発売したものは、何と 2 分の 1 が教皇のものとしてされた。

しかし、当時すでに国王による中央集権化が進んでいたイギリス・フランスでは、贖宥状を販売しづらくなっていた。一方ドイツは、“神聖ローマ帝国”が名ばかりとなっていたため、贖宥状販売の恰好のターゲットだった。（よってドイツは“ローマの牝牛”と呼ばれていた。）

ヴィッテンベルク大学神学科教授マルティン・ルターは、1517 年 10 月 31 日、宮殿教会兼大学教会の扉（写真、当時のままではない）に「95 箇条の論題」を掲げた。この扉は大学の掲示板の役割も果たしていたのである。

この論題は「贖宥状を購入すれば罪の許しが得られるというのは、“人は信仰によってのみ義とされる”というキリスト教の教義に反するのではないか」ということを、神学者同士で議論するための“たたき台”として提示したものであり、貴族・聖職者しか使わないラテン語で書かれていた。

しかし何者かがこれをルターに無断でドイツ語に翻訳し、半世紀前に発明されたばかりの活版印刷で流布させた。さらには木版印刷による漫画まで添えたパンフレットまで出回る始末だった。（宗教改革は著作権法違反とメディアの進歩によって始まった、とも言える。）

1519 年、ルターは、カトリック教会側の神学者エックとのライプツィヒ討論において、「教皇も誤りを犯す」との発言をしたため、1520 年に教会からの破門警告書を受けることとなる。それをルターは公衆の面前で焼き捨てたため、翌 21 年に正式に教会から破門された。また同年に開催されたヴォルムス帝国議会において、皇帝カール 5 世からも「帝国の法で保護できない」と言い渡されたルターは、ザクセン選帝侯の保護のもとヴァルトブルク城で聖書のドイツ語訳を完成させる。



今年 2017 年は、ルターによる宗教改革から 500 周年という記念の年である。ルター派の教会では、彼が「95 箇条」を掲示した 10 月 31 日を宗教改革記念日として祝日としている。

バッハが宗教改革記念日のために書いたカンタータとして有名なのは第 80 番「我らが神は堅き砦」である。ルター作のコラールをもとに 1724 年の記念日用に作曲されたものだ。

我々が本日歌う第 79 番「主なる神は日なり、盾なり (Gott der Herr ist Sonn und Schild)」は、翌 1725 年の記念日のために作曲され、1730 年に再演されたものである。

第 1 曲と第 5 曲は後にミサ曲ト長調 BWV.236 の第 2 曲 (Gloria) と第 4 曲 (Domine) に転用された。また第 2 曲はミサ曲イ長調 BWV.234 の第 5 曲 (Quoniam) に転用された。

第 1 曲はティンパニ連打とホルンが活躍する長い前奏が特徴である。ティンパニ連打はルターが「95 箇条」を扉に釘で打ちつけている描写らしい。前奏の中盤フーガの音型も「釘打ち」そのものだ。

第 2 曲は、フルートのオブリガートを伴うアルトのアリア。ただし初演版ではオブリガートはオーボエだった。フルートは再演版らしい。

第 3 曲は、マルティン・リンカールト作詞作曲のコラール“Nun danket alle Gott”を、第 1 曲と同じモチーフによるオーケストラが彩る。

第 4 曲はバスのレチタティーヴォ、第 5 曲はソプラノとバスの二重唱。

そして終曲第 6 曲は、ルートヴィヒ・ヘルムボルト作詞作曲のコラール“Nun laßt uns Gott, dem Herren”の最終第 8 節である。このコラールは、本日この後に演奏するシュッツの曲でも第 5 節・第 6 節が用いられている。

## ハインリヒ・シュッツ(1585-1672)

### ムジカーリッシェ・エクセクヴィーエン (音楽による葬送) op.7, SWV279-281

シュッツはバッハのちょうど百年前に生まれた「ドイツ音楽の父」と言うべき存在である。

1609年、ヴェネツィアに留学。聖マルコ大聖堂の作曲家・オルガニストであったジョヴァンニ・ガブリエリに師事し、複合唱様式やコンチェルト様式を学んだ。これらの様式は聖マルコ大聖堂特有の空間に由来する。この聖堂内では、別々の聖歌隊ないしは合奏団が、筋向いに相対することになるため、聖歌隊が互いに歌い交わすことで素晴らしい効果が得られるのだ。

ガブリエリの死後 1613年にドイツに戻り、15年からザクセン選帝侯のドレスデン宮廷楽団(現シュターツカペレ・ドレスデン、現存最古のオーケストラ)の指揮を任せ、17年には宮廷作曲家となった。よって劇音楽やバレエなども多く作曲したはずだが、それらはほとんど残っていない。

現存する彼の作品の大部分は宗教音楽である。ドレスデンの聖十字架教会には彼のレリーフが掲げられており、当然指揮もしたであろうが、クロイツカントル(聖十字架合唱団指揮者)には就任しなかった。

1618年に始まったルター派 vs カトリックの三十年戦争は、「Memento mori(死を忘れるな)」をモットーとするバロック時代を象徴する大事件であった。14世紀同様この頃もまたペストが流行し、特にドイツでは世界史でいうところの「17世紀の危機」の時代となった。シュッツも戦争中に多くの家族親族を亡くしている。

また戦争中の1628年から約1年、シュッツは再びヴェネツィアを訪れ、師ガブリエリの後をうけて聖マルコ大聖堂楽長となっていたモンテヴェルディの新しい音楽にも触れている。器楽伴奏を伴い単旋律で聴き取りやすく歌詞を歌うモノディ様式はまずオペラに用いられ、さらに彼の「聖母マリアのための夕べの祈り」によって宗教音楽にも用いられるようになっていた。

「音楽による葬送」には、シュッツがヴェネツィアで学んだ上述の様式が用いられている。

この曲は、シュッツの故郷ケストリッツの領主ハインリヒ・ポストゥムス・フォン・ロイス公(Heinrich Postums von Reuss, 1572-1635)の葬儀のために作曲された。公はザクセン選帝侯の宮廷の賓客でシュッツの芸術のよき理解者であった。死期を悟った公は、美しい装飾がなされた自分の棺に聖句とコラールの詞を刻み込ませ(下の写真)、シュッツにそれらの詞を使って作曲するように依頼したのである。公の葬儀は1636年2月4日に行われた。

曲は3部に分かれている。

- ・第1部「ドイツ葬送ミサの形式による  
コンツェルト」SWV.279
- ・第2部「モテット」SWV.280
- ・第3部「シメオンのカンティクム」SWV.281

現在それぞれにSWV番号が付されているが、シュッツが生前にこの曲を出版した時はまとめて「作品7」としている。



第1部は、Kyrie・Gloriaのみからなるルター派のミサ・プレヴィスの形式による。重唱・独唱曲と合唱曲が交互に演奏される。Kyrie部分の合唱は父・子・聖霊それぞれへの呼びかけになっている。

一方Gloria部分は、内容的にはミサのGloriaそのものではない。しかし曲の大半を占めるこの部分はシンメトリー構造になっていて、また、続く第2部・第3部への伏線も張られており興味深い。次ページにGloria部分の構造を表で示す。

ソロ&合唱の組が前後半4つずつある。最初と最後の合唱にはルターの同じコラールが置かれている。同様に前半2番目と4番目には、ヘルムボルトのコラールが置かれている。音楽もそれぞれ同一の素材で作曲されているので、聴く者にも「枠構造」が感知できる点は、ブラームスのドイツ・レクイエムに通ずる技法である。また、前後半の間に聖句だけの2曲組が置かれているが、そこの歌詞もブラームスがドイツ・レクイエム第3楽章で用いた「正しき人の魂は主の手中にあり、どんな責め苦も受けることはない」(知恵の書)である。

後半最初の組は、聖句が第2部の歌詞と同じ詩編73番である。コラールはルターの「平安と喜びもて我往かん」の最終節だが、このコラールの歌詞は、第3部の「シメオンのカンティクム」をルターが敷衍して作ったものである。

先唱	T	新約	ヨハネ伝3:16	Also hat Gott die Welt geliebt,	
9	SST	"	"	Auf daß alle, die an ihn gläuben,	
10	Choral	ルター		"Nun freut euch lieben Christen g'mein" 第5節	
11	ST	新約	ヨハネ第1		
12	Choral	ヘルムボルト		"Nun laßt uns Gott, dem Herren," 第6節	
13	SB	新約	ピリピ書簡		
14	Choral	レオン			
15	TT	旧約	イザヤ書		
16	Choral	ヘルムボルト		"Nun laßt uns Gott, dem Herren," 第5節	
17	A	旧約	イザヤ書		
18	SSB	旧約外典	知恵の書3	Der Gerechten Seelen sind in Gottes Hand,	
19	T	旧約	詩編73:25	Herr, wenn ich nur dich habe,	第2部
20	ATTB	"	26	wenn mir gleich Leib und Seele verschmacht,	
21	Choral	ルター		"Mit Fried und Freud ich fahr dahin" 第4節	→ 第3部
22	BB	旧約	詩編90		
23	Choral	ギガス			
24	T	旧約	ヨブ記19:25	Ich weiß, daß mein Erlöser lebt,	3拍子系 に変化する
25	Choral	ヘルマン			
26	SSATTB	旧約	創世記32:27	Herr, ich lasse dich nichts,	
27	Choral	ルター		"Nun freut euch lieben Christen g'mein" 第7節	

第2部「モテット」は、上記のように詩編73番の句を、2つの4部合唱によるヴェネツィア仕込みの複合唱形式で壮麗に歌い上げる。

「主よ、あなたさえ得られるなら私は何も気にかけない。あなたはいつも私も心の慰め。」

第3部はコンチェルト形式。

第1グループ(合唱)は「シメオンのカンティクム」を歌う。シメオンの物語は「ルカによる福音書」第2章25-32節に書かれている。

信仰の厚いシメオンは、救世主に会うまでは決して死なない、とのお告げを受けていた。彼が神殿の境内に入った時、ちょうど幼子イエスを連れた両親も入ってきた。その際、シメオンが幼子イエスを抱いて、神を讃えた言葉がこの聖歌である(ラテン語では「Nunc dimittis」)。

「主よ、今こそ私を安らかに去らせて下さいます。私は救い主を見たのですから。この方はあるゆる民のためにあなたが用意された異邦人を照らす光、イスラエルの誉れです。」

それと掛け合う第2グループは、シュッツによって、ソプラノ・ソロ2名が天使セラフィム、バスのソロは祝福された魂と説明されている。歌詞はブラームスのドイツ・レクイエム最終楽章と同じ「主にあつて死ぬ者は幸せである(Selig sind die Toten, die in dem Herren sterben.)」

(黙示録14:13)と、Gloria第1部中盤で用いた「彼らは主の手中にあり…」(知恵の書)を歌う。

第1部と同じく終盤で3拍子系に変化して、第1合唱が「異邦人を照らす光」と歌うと、第2グループも同じ音型で「主の手中にあり」と唱和する。最後、第2グループはsterben(死す)と歌った後沈黙し、第1合唱が「イスラエルの誉れ」と讃えて全曲が閉じられる。

ところで、「シメオンのカンティクム」は、老シメオンによる現世への別れの言葉であると同時に、幼子イエスを通しての新たな生命への祝福の言葉でもある。

シュッツは、その人生の中盤、働き盛りの時、三十年戦争という未曾有の“人災”に直面していた。その中でこの曲を作曲していた際、死せるロイス公のみならず、苦しみの中にある多くの同時代人々のことも、彼の念頭にはあっただろう。

私たちもまた、昨年のブラームス「ドイツ・レクイエム」特別演奏会と同じく、東日本大震災や全世界の“人災”(戦争・テロ)の犠牲者の鎮魂とともに、それらに苦しむ方々の慰めと希望のためにこの曲を捧げたいと思う。

## ヨハン・セバスティアン・バッハ マニフィカト ニ長調 BWV.243/243a

一昨年 2015 年 2 月の第 36 回演奏会において、私たちは「ルネサンス時代のマニフィカト集」と題して、ラッソ、バード、ヴィクトリア、パレストリーナのマニフィカトを演奏した。

それをうけて今回はバッハのマニフィカトを歌う。これまで多くのバッハ作品を演奏してきた仙台宗教音楽合唱団 50 年の歴史において、何故かこの名作は 1 度もプログラムに載ったことがなかった。

歌詞は「ルカによる福音書」第 1 章 46-55 節。天使ガブリエルから受胎告知を受けたマリアが、同じく洗礼者ヨハネを身ごもっていたエリザベツのもとを訪れた際に、神の御業を讃えて言った言葉である。その冒頭「私の魂は主をあがめます(Magnificat anima mea Dominum)」から「マニフィカト」と呼ばれる。マリアの言葉に続けて最後に栄唱(Gloria Patri)を付けて歌われるのが常である。

東方教会に起源を持ち、9 世紀頃にローマ・カトリックにも取り入れられ、晩禱（夕べの祈り、ヴェスペレ）の歌詞の最後に位置する。

バッハの時代には、ルター派の教会においてもクリスマス・復活祭・聖霊降臨祭には演奏されていた。

前回の演奏会でとりあげたルネサンス期のマニフィカトは、いずれも 1 つの切れ目の無い曲として作曲されていた。しかしバロック時代になると節毎に曲がつけられ、規模の大きな組曲として作曲されるようになる。すでにモンテヴェルディの「聖母マリアの夕べの祈り」末尾のマニフィカトにもその萌芽が見られるが、管弦楽伴奏の壮麗なマニフィカトということになると、ヴィヴァルディ、クーナウ（バッハの前任のトマスカントル）、ゼレンカ（バッハと同時代のドレスデン宮廷カトリック教会作曲家）などの作品がある。

バッハは、ライプツィヒのトマス教会のカントルに就任した 1723 年のクリスマス用に変ホ長調のマニフィカトを作曲した(BWV.243a)。この時は、クリスマス用の挿入歌 4 曲を含んでいた。のち 1728~31 年に挿入歌を除いてニ長調の曲(BWV.243)を作った。これが現在一般的に演奏される版である。

今回、私たちはニ長調の BWV.243 に、それにあわせて転調した BWV.243a の挿入曲を加えて演奏する（クリスマスとはだいぶ季節が違うが）。曲の構成は次の通り。

第 1 曲、トランペットが活躍する華やかな合唱曲。

第 2 曲、ソプラノ II が「私の霊は救いの神を喜び称える」と歌う。その後にルター作のコーラル「天高くから私は来た」が挿入される。

第 3 曲、ソプラノ I がオーボエを伴って「この卑しい女を目にとめてくださった」としみじみと歌い上げる。その末尾「私を祝福された者と呼ぶでしょう」の主語にあたる「全ての世代の人たちが」が第 4 曲の合唱として切れ目なく歌われる。

第 5 曲、バスが堂々と「力ある方が私に大きな事をしてくださった」と歌う。その後に挿入合唱曲「喜び歓声を上げよ。ベツレヘムにイエスが見つかった」が歌われる。

第 6 曲、アルトとテノールの二重唱で主の哀れみをしつとりと歌い上げた後に、第 7 曲では「主は傲慢な者を打ち倒す」と力強い合唱が歌う。その後にラテン語合唱の Gloria が挿入される。第 8 曲でもテノールが、権力者を打ち倒し身分の低い者を引き上げる主の御業を力強く歌う。続く第 9 曲では、アルトが「飢えている者を良いもので満たし、富める者は空腹のまま追い返す」と歌う。その後、ラテン語挿入曲 Virga Jesse が「エッサイの若枝が花を咲かせイマヌエルが生まれた」と、ソプラノ I とバスの二重唱で歌われる。エッサイとはダヴィデ王の父であり、救世主がダヴィデの子孫から生まれたことを意味している。

第 10 曲、ソプラノ I・II とアルトの三重唱が神秘的に「主はその僕イスラエルを助けてくださった」と歌ったあと、第 11 曲では、合唱が「アブラハムとその子孫に約束されたとおりに」との教条を素朴なフーガで歌う。

最後の第 12 曲栄唱では、三位一体のそれぞれの位格に対し三連符の上昇音型を伴って Gloria! と歌った後、第 1 曲の音楽に戻って「初めにそうであったごとく、いつも、いつまでも」と歌い全曲を閉じる。